



BEFORE

Dining

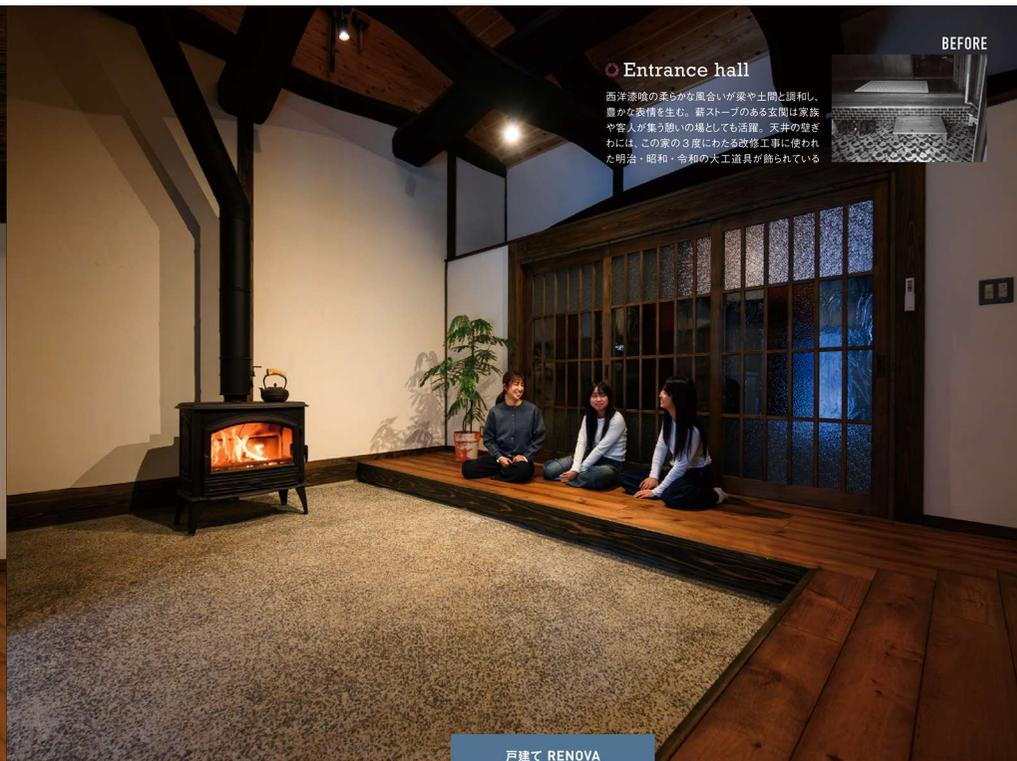
元々使っていた低めのラウンドテーブルは、天井高を抑えたダイニング空間にひびきたり、キッチンカウンターは造作で、ダイニング側に設けた収納も便利

明治から令和へ、時代を超えて

住み継ぐ価値を実感。



広い玄関ホールでは、巨大な梁がお出迎え。天井を解体して現れたもので、施主も存在を知らなかった「お宝」。既存の色に合わせ黒櫃色で塗装し、空間に重厚感を与えている



BEFORE

Entrance hall

西洋涼風のさらかな風合いが梁や土間と調和し、豊かな表情を生む。薪ストーブのある玄関は家族や客人が集う憩いの場としても活躍。天井の壁ぎわには、この家の3度にわたる改修工事に使われた明治・昭和・令和の木工道具が飾られている

戸建て RENOVA

Case 00

古賀市 M邸

ハウスランド社

刻まれた歴史と快適さが同居する 明治の記憶を未来へつなぐ古民家再生

曾祖父の代に建てられた実家は築100年超。もはや改修すら叶わないと思われていた建物は、古民家再生スペシャリスト集団の手により面影を残したまま新たな命を吹き込まれました。

女性建築士が感嘆した
100年超を
生き延びた建築物

Mさん一家が暮らすのは、妻の曾祖父が明治期に建てたとされる古民家。実に4世代にわたって住み継がれてきた家は、冬の厳しい寒さや、度重なる修繕でも補いきれない不具合に悩まされるようになっていた。「私たち家族の家は、別の場所に新しく建てた方が



いいのではと思っていたんですが、主人がどうしてもこの家を残したいと言ってくれて、こんなに古い建物の改修を手掛けてくれる会社はあるのか、と半ば諦めていたんですが、ハウスランド社の存在を知り、早速問い合わせました。古民家再生モデル住宅「風のくら」を見学させていただき、相談ののっぴもらったんです。現地調査に訪問した時のことを、建築ディレクターで二級建築士の糸山葵さんは次のように語る。「目見えて、すごく立派な古民家だとわか

りました。屋根裏は隠れた状態でしたが、天井に太い梁が入っていることが想像できて、「ぜひ私たちに改修させてください」とお伝えしました。Mさん夫妻もその言葉を信頼し、同社に再生を託すことにした。



右、昔の和室に使われていたガラス戸を、リビングと玄関ホールの間仕切り建具として再利用 / 左、玄関に入って真っ先に目に飛び込んでくるのは、オリジナルデザインのスタンドグラス風の建具

私の Check リノベオージャー

老朽化して悪くて不便、だけど「古い良さ」を残したい。築年数の古い家で非常に寒かったため、寒さの解消や生活動線の改善を求めていました。一方で、古い家の良さを活かしたデザインも取り入れたいと思っていました。